

一橋大学山岳会カカボラジ峰登山隊

偵 察 隊

報 告 書

1995年4月

一橋大学山岳会カカボラジ峰登山隊

偵察隊

報告書

1995年4月

はじめに

ミャンマーの最高峰カカボラジ(5,881m)は、半世紀以上にわたって外国人に対して門戸が閉ざされていましたが、このたび、一橋山岳会は、ミャンマー政府から登山のための偵察隊を派遣する許可を得る事ができました。私たち偵察隊は、各方面の皆様の暖かいご支援のお陰で、地球上に残された数少ない辺境の地を旅することができました。ここに、簡単ではありますが、その概要を報告させていただきます。

ミャンマー北部のカカボラジ峰の初登頂を目指し、その登頂ルートを探る事が偵察隊の大きな目的でした。結果としては、残念ながら諸々の事情により、当初目標としたベースキャンプ予定地に到達することはできず、山の姿を見ることすらできませんでした。その点では、ご支援頂いた皆様のご期待に充分応えることができず、不本意な成果しか上げることができませんでした。しかし、その一方で、事前に十分な現地情報が得られないまま出発しながらも、ミャンマー最奥の地域に外国人としては戦後初めて足を踏み入れることができ、本隊につなげることのできる多くの現地情報を入手し、また現地の人的ネットワークの構築も行うことができました。

さいわい、大きな事故もなく、全メンバーが無事に全行程を歩くことができたことは、本隊に向けての貴重な経験となりました。この経験を充分活かして、来るべき本隊でのカカボラジ峰の初登頂に結びつけたいと思っています。今後とも皆様からのご支援、ご指導をよろしくお願い申し上げます。

一橋大学山岳会カカボラジ峰登山隊

偵察隊 隊長 引地 真

一橋大学山岳会カカボラジ峰登山隊 偵察隊報告書

1. 期間 : 1995年2月4日～4月2日

2. 隊員 (一橋大学山岳会)

隊長 引地 真 (37歳)

副隊長 古田 茂 (24歳)

隊員 古瀬 泰介(22 歳)

(読売新聞社)

記者 上堀 慶(28 歳)

カメラマン川口 敏彦(31 歳)

記者 当間 敏雄(31 歳) (バンコク総局から 2 月 14 日まで参加)

(リエゾンオフィサー)

ウ・ラ・テイ(38 歳)

キン・マウン・テイン(30 歳)

*さらに、当方の現地代理人の指名により、キャラバンマネージャーとしてサン・ミン・マウン(37 歳)が、全行程同行した。

カカボラジ峰の呼称について

偵察隊出発までは、目標とする山の日本語表記を「カカルポラジ」としていたが、今般現地ラワン族住民から直接ヒアリングしたところ、「カカボラジ」と発音していることがわかった。また、その言葉の意味するところも調べることができた(後掲)。したがって、今後はすべて日本語では「カカボラジ」と表記することにした。なお、英文では従来から“HKAKABO RAZI”と表記していた。

カカボラジ偵察隊記録

2 月 4 日

13:55 成田発 19:00 バンコク着

読売新聞/バンコク支局の方々と会食

2 月 5 日

14:50 バンコク発 15:30 ヤンゴン着 現地代理人ウ・エイミン氏宅へ

別送品・現地調達品のチェック

2 月 6 日

午前、辺境局長テン・ハン中佐に挨拶

体育局にて、アグリーメントのため交渉

午後、食料品等追加買い出し

2 月 7 日

午前、現地調達品パッキング 日本大使館にて小田野公使に挨拶

午後、現地調達品パッキング リエゾン来訪

2 月 8 日

買い出し、パッキング

2 月 9 日

地図入手コピー、買い出し、パッキング

2月10日

8:00 空港へ、荷物の総重量は、約 790Kg 11:30 ヤンゴン発(定刻は 10:30) マンダレー経由、

13:30 ミッチーナ着

ナンディダゲストハウス泊

2月11日

体育局のターントオン氏、ミーシャ氏の案内で、ミソへ。

2月12日

ユニオンデー、LORC(法秩序回復評議会:ミャンマー政権政党の地方機関) 書記のティン氏
挨拶

元愛知教育大学留学生キンミャーミャーさんを訪問

13:15 ミッチーナ発、13:50 プータオ着

軍のゲストハウスに、カカボラジ方面の概念図とビデオテープがあった。

ゲストハウス泊

2月13日

午前、プータオ近くの橋を見学

午後、パッキングのチェック。不要なものをデポし、それ以外のものについてはキャラバン中
たびたび開ける箱と、BC まで明けない箱に分けてパッキング。

2月14日 晴

13:00、軍用トラック 2 台でマツチャンポーへ、マツチャンポー入り口の渡し 14:00~15:00、川を渡
るとマツチャンポー、マツチャンポーはプータオ郡とは別の郡(マツチャンポー郡)の中心地。(標
高 380m)ゲストハウス泊。

2月15日 曇午後雨

7:00、ポーターが集まる(47人)、男手は砂金堀等でいないので、女性・子供が多い

荷物の配分がうまくいかず、結局出発は 9:05 まで遅れた。林道サイズの広い道が続く。

11:35 ナンカン、12:10 ナンカンの北端の家、ここに泊めてもらう。ナンカンも大きい村。砂金堀り
が村をあげての産業となっている。夜、バプティスト派の牧師が訪問、カ・カブー・ラジーの名の
由来について、カは word を、カブーは joyful を、ラジーは mountain を意味すると説明。登山適
期については、10 月がそれほど雨が少なくて良いと言う。ナンカンにて、ポーターが 15 人逃げ
た。

(マツチャンポー~7 マイル・net・2:40~ナンカンでの宿泊地 標高(以下同)420m)

2月16日 雨

9:05 出発 川を離れ上りになる。道は、日本の登山道とかわらない。特に分かりにくいところも
ない。12:05、1000m付近(峠)ここからゆっくり下降、川を吊橋で渡ると下ナムティー(15:30)廃
村。17:30 上ナムティー着。小屋は 2~3 棟。ポーター 5 人逃亡。

(ナムティー~11 マイル・net7:20~ナムティー 900m)

2月17日曇一時雨

7:20 出発、12:15、1750mの峠(最高地点) この後、ナグモン方面を見下ろせるところを通ってマザへ向かって下降。14:45 マザ着。小屋は1棟だけ、他に20~30人が泊まれる岩小屋がある。

(ナムティー~net6:20~マザ 920m)

2月18日曇

8:10 出発、山腹をひたすら下降。9:10 河原に出た。ここからはほぼ平坦。12:15 ナグモン着、戸数280戸もあるという大きな町。60年代にはプータオから車も来ていたらしいし、10年ほど前までは飛行機の定期便もあったという。今は飛行機の来ない滑走路だけが残っている。ナグモン郡の中心地。電話はないが、電報は打てる。ゲストハウス泊。LORC議長ほか町の有力者来訪。ウイン・ロウン氏、マン・ホン・ミン氏からはカカボラジ伝説につき詳しい話を聞くことができた。

(マザー~net3:30~ナグモン 500m)

2月19日曇一時雨後晴

ラワン族は敬虔なクリスチャンなので、日曜日にはポーターが集まらないということで、一日OFF。

2月20日夜半豪雨後晴

ナグモンでは先行する尾崎隊フランス隊のために十分なポーターが集まらないということで、ポーター30名に加えて馬14頭を利用。ナグモンから山越えて一日でゴレットウへいく道もあるが、険しくて、荷を持ったポーターは通れないというので、川沿いガトウ経由でいく道を探る。この道は昔はプータオから車がきていたという道で広い。今でも牛車など通っている。ナグモンからは、BCまで、マン・ホン・ミン氏がガイドして下さる。

ナグモン発12:50、クムリン(ナグモンから4マイル)には10:25、ラトウボウには12:10、ガトウ着は14:00。戸数はかなりある。美しい村。

(ナグモン~12マイル・net4:30~ガトウ 500m)

2月21日曇後雨後晴

8:05 出発 9:35 ランサートウ、10:45 ロンゴー、13:50 ゴレットウ

ゴレットウは7戸の小さな村。

(ガトウ~12マイル・net5:00~ゴレットウ 600m)

2月22日雨後晴

ここから先は、馬が行けないということでポーターを雇う。ゴレットウよりもここまでの村の方が大きいので、ロンゴーのなど途中の村で集める。

8:30 出発、1時間程川沿いの平坦な道を行ってから登り始める。12:20 サンラ沢の滝、13:45 シンツァン着、村ではないが、旅人の為の小屋が2棟ある。

(ゴレットウ~7マイル・net4:20~シンツァン 1100m)

2月23日曇時々晴

8:20 出発、ワイピーラジの肩(約 1700m)を越える。この山を境に天気は変わりやすい。12:15 メカ川を吊橋で渡る。(ナムタマイと言う名称は通じなかった。)ここから 15 分ほどでバンナムディン。バンナムディンは戸数 5~6 戸の小さな村。ワイピーラジを越えると、人々の生活スタイルも山型になり、焼畑が目立つようになる。

(シンツァン~8 マイル・net3:45~バンナムディン 940m)

2月24日曇一時雷雨

8:30 出発、キングドン・ウォードの記述する松林は、焼畑のためか、もう無い。メカ川沿いの道は小さなアップダウンを繰り返すが、ガワイまで、概してほどよく広く歩きやすい道が続く。13:30 ロンナ着。

ロンナは村ではなく、2 棟の小屋があるだけ。夜ポーターのテントで礼拝のあとラワンの踊りを披露してくれた。

(バンナムディン~8 マイル・net4:25~ロンナ 940m)

2月25日曇一時雨

8:40 出発、11:40 頃ヤンルー、13:10 ンガワ着

ンガワは水田の豊富な村で、庭園ふうの趣のある美しい村だ。チベタンもここまで米の買い出しにくるが、ナグモンに比して高いという。村の戸数は 15 戸。

(ロンナ~8 マイル・net4:05~ンガワ 1000m)

2月26日曇

今日は日曜だが、ポーターが動かないということはなく、8:50 スムーズに出発。10:30 頃アツラというラタンの網を張った渡し付近。この辺りは銀山があるという。13:50 ワンシーワン着。ここも村はなく、小屋があるだけ。小屋は 4 戸。

(ンガワ~8 マイル・net4:25~ワンシーワン 1050m)

2月27日曇

8:35 出発、11:45 頃尾崎隊一行と出会う。12:15 ガワイ着。

ガワイは比較的大きな村で、戸数も 22 戸。ヒマラヤ周辺にのみ住む珍しいターキンの子供を飼っている家があった。ここで、今後の予定を、グバ方面からカカボラジの偵察を試みることに変更。

(ワンシーワン~6 マイル・net3:15~ガワイ 1120m)

2月28日曇時々雨

6:50 出発、25 分ぐらいでメカ川を渡る竹の吊橋。ここから 1 時間強、泥々で狭い悪い道が続く。13:35 タニャン・ワンにかかる 3 段 50m ぐらいの滝下を通過。14:50 吊橋を渡ってダズンダンに入る。

ダズンダンは 10 戸弱アドウン谷とサンク谷の合流点。ここでは、フランス隊フランク・チャールトン氏に出会った。彼は、未知の地にはいって、冒険的な企画を作りそれを売り込むことを業としている。今回はダホンダンまで行って引き返してきたところ。

(ガワイ~12 マイル・net6:30~ダズンダン 1250m)

3月1日 曇後雨

先の道や橋を整備しに村長さん達が先に出発。我々の出発は9:20、グバへの道は、外国人としては初めてであることは勿論だが、現地人の通行もこれまでと比べてかなり減るらしく、道は少し悪くなるが危険なところはない。しばらく、サンク谷左岸を行くが、11:40 吊橋でサンク谷を渡り、以後右岸を行く。15:25 グバに入る。グバはチベット人の村で、戸数は6戸ぐらいと少ないが、柵で囲われた麦畑を持っているので村は広い。泊めてもらう民家に着いたのは15:50。宗教は勿論、衣類から食物、家畜、家の作りまでラワンのそれとは全然違う。

今後の予定についてリエゾンともめた結果、明日はマディンまでということになった。

(ダズンダン～9マイル・net5:40～グバ 1780m)

3月2日 晴

初めて、空高く澄み渡る晴天。西から北東にかけて純白の山がぐるりと見渡せる。

8:50 出発、いったんサンク谷へ降り、谷を渡って対岸を登りかえす。マディンの手前で谷は二俣になり、右俣上部にマディンがある。マディン着 10:15

マディンもチベット人の村で、戸数は8戸。もともと、マディンと言う村はなく、グバも、ラワンの村だったが、1950年代、人民解放軍のチベット進攻時にチベットから逃げて来たチベット人がこの辺りに住むようになった。したがって歴史は浅い。

マディン到着後、その先の偵察。マディン発 11:30、13:00 最高到達点(標高2170mまで行って折り返し。14:30 マディン着)

当初、ダズンラジの峠を目指す予定だったが、峠からもカカボラジは見えないということ、途中雪崩の危険があることから、危険を冒しても得られるものは少ないと判断し中止。

(グバ～2マイル・net1:25～マディン 1850m)

3月3日 曇

OFF

3月4日 曇

7:35 出発、グバ(8:45～9:00)。11:50 サンク谷を渡る吊橋、14:00 ダズンダン着、行きにはみかけなかった梅(?)が咲いていた。妙なところで春を感じる。ここで、食糧および装備の一部を本隊のためにデポ。

(マディン～11マイル・net5:30～ダズンダン)

3月5日 雨後曇

7:25 出発、8:30 タニャン・ワンの滝下。12:20～歩きにくい悪い道。13:30 吊橋、14:30 ガワイ着。ここでも梅がかなり咲いている。

(ダズンダン～12マイル・net6:00～ガワイ)

3月6日 曇

7:10 出発、10:10 ワンシーワン、13:20 アツラのところで実演会。15:30 ンガワ着。

この日は、往路の2日分歩いた。ポーターはかなり遅れ、1日行程としてはこれぐらいが限界のようだ。

(ガワイ～14 マイル・net7:10～ンガワ)

3月7日 曇一時雨

8:35 出発、9:50 ヤンルー、12:25 ロンナ着。

(ンガワ～8 マイル・net3:30～ロンナ)

3月8日 雨後曇時々晴

8:00 出発、12:25 バンナムディン着

(ロンナ～8 マイル・net3:55～バンナムディン)

3月9日 曇後晴

この日も往路の2日分歩く。6:50 出発ワイピーラジをガスのなか登るが、肩に上がるとその向こうは晴だった。9:40 ワイピーラジの肩を越す。山腹を巻くように下降。10:55 シンツァンにて大休止。11:35 発、往路泥々だった道が復路にはよくしまった道になっているところから、3月に入ってナグモン側はかなり天候が安定して来ていることが推測できる。16:00 ゴレットウ着。

(バンナムディン～8 マイル・net3:55～シンツァン～7 マイル・net3:50～ゴレットウ)

3月10日 曇後晴

7:25 出発、9:50 ロンゴー、11:00 ランサートウ、12:45 ガトウ、14:30 ラトウボウ着、ラトウボウは道ぞいに長い村で、数少ない中学校がある。ラトウボウは、川の合流点で、ここから、車道でプータオへ行く道が通じている。ただ現在は荒れてほとんど使われていない。

(ゴレットウ～12 マイル・net4:35～ガトウ～3 マイル・net1:25～ラトウボウ)

3月11日 曇後晴

8:05 出発、9:50 グムリン、11:45 ナグモン着

余った食料は、マーケットに売却。

3月12日 晴

OFF

午後、マン・ホン・ミン氏宅にお礼に行く。

3月13日 夜半豪雨昼には晴

OFF

10:00 すぎ、全国統一試験答案用紙回収のヘリがきた。

荷物を舟に乗せるため、共同装備の防水。

3月14日 曇後晴

車の見通しが十分でないということで、しばらく待機。11:50 舟で出発。丸太をくりぬいて作った舟で、極めて安定が悪く、吃水線が縁すれすれで、びしゃびしゃになる。歩くより早いという話だったのに、歩くほうが早い。ラトウボウに着いたのは15:10。30分休憩の後マクイザへ。16:55 マクイザ着。マクイザは小さな村だが、確かに自動車の轍がある。

3月15日 晴

10:30 に車がかかるというので待つがこない。やっと来たのは夜の 11:00 すぎだった。シンプルで大型のトラック。プータオに同じトラックが何台もあったがその 1 台のようだ。鉄道会社所有だという。1 台 20000K とやたら高い。

3 月 16 日 晴

8:30 出発、道が最悪の部類に入る。荷台の上では跳ね飛ばされ叩きつけられをずっとくりかえす。途中エンストして止まっているトラックをワイヤーでひいて動かそうとするが、これに 1 時間かかる。タンガ 13:20~35。17:05 マッチャンボーのマーケット着。プータオ着は 19:00。今日は天気が良かったので 1 日でプータオまで行ったが、雨が続けていたりで道の状態が悪いとプータオまで車で 2 日以上かかるという。

3 月 17 日 晴

ミッチーナまで飛ぶ。定期便は欠航。外国人だけ荷物輸送用のプロペラ機でミッチーナまで運んでくれた。プータオ発 16:55、17:35 ミッチーナ着。またナンティダゲストハウスへ。

3 月 18 日

ミッチーナでは LORC の議長、軍のコマンダーに会って、ヘリについて交渉する予定だったが、LORC 書記に会っての手応えは、ヤンゴンでなければ交渉になりそうにもないというもの。

3 月 19 日

LORC 書記の紹介で観光局のティンスエ氏と会う。氏はカカボラジに行ったと言う話だったが実際は文献から情報を得ただけだった。

午後、15:00 ミッチーナ発、マンダレー経由、ヤンゴン着は 17:05。

共同装備の乾燥と、ヤンゴンデポのため、装備類のチェック。

3 月 20 日

午前

装備チェック

ミャンマー航空にヘリのチャーターを打診してみるが、利用できるヘリはないという返事。

午後

マン・ホン・ミン氏の兄マン・シン・サー氏を訊ねた。カカボラジ周辺の状況、天候、そして詳しいカカボラジ伝説を教えてくださいました。カカボラジ近辺がよく晴れるのはやはり 8・9 月とのこと。

3 月 21 日

午前

首相府にてヘリの交渉を試みるが、目当ての人は不在。デポ用装備のパッキング。10:30 から体育局にて偵察の報告。本隊のパーミッションは、1 隊だけにしてほしいという旨の申し出に対しては、うやむやな解答。首相府に提出するための報告書作成。

午後

小田野公使らと昼食の席、偵察の報告。本隊についても大使館ができるだけサポートしてくれるとのこと。首相府にヘリについての交渉。即答は得られず連絡待ち。

首相府宛て、ヘリコプターのアプリケーション提出。

3月22日

首相府宛て、修正を加えた2度目のアプリケーション提出。

3月23日

古田、ヤンゴン発。

3月24日

古田、成田着

3月25日

装備の整理

3月26日

OFF

3月27日（ミャンマー国軍創設50周年記念日）

1956年国境調査隊のレポートとカカボラジの写真のコピー入手

3月28日

ヘリコプターのチャーターの状況確認

3月29日

ヘリコプター（航空機）のチャーターに関し閣議承認される。

3月30日

航空機チャーター料金の提示がある。料金が折り合わず交渉の打ち切りを決める。

3月31日

体育局、首相府の協力に関する謝辞を述べ、帰国の挨拶をする。

4月1日

引地、古瀬、ヤンゴン発、バンコク着

4月2日

引地、古瀬、バンコク発、成田着

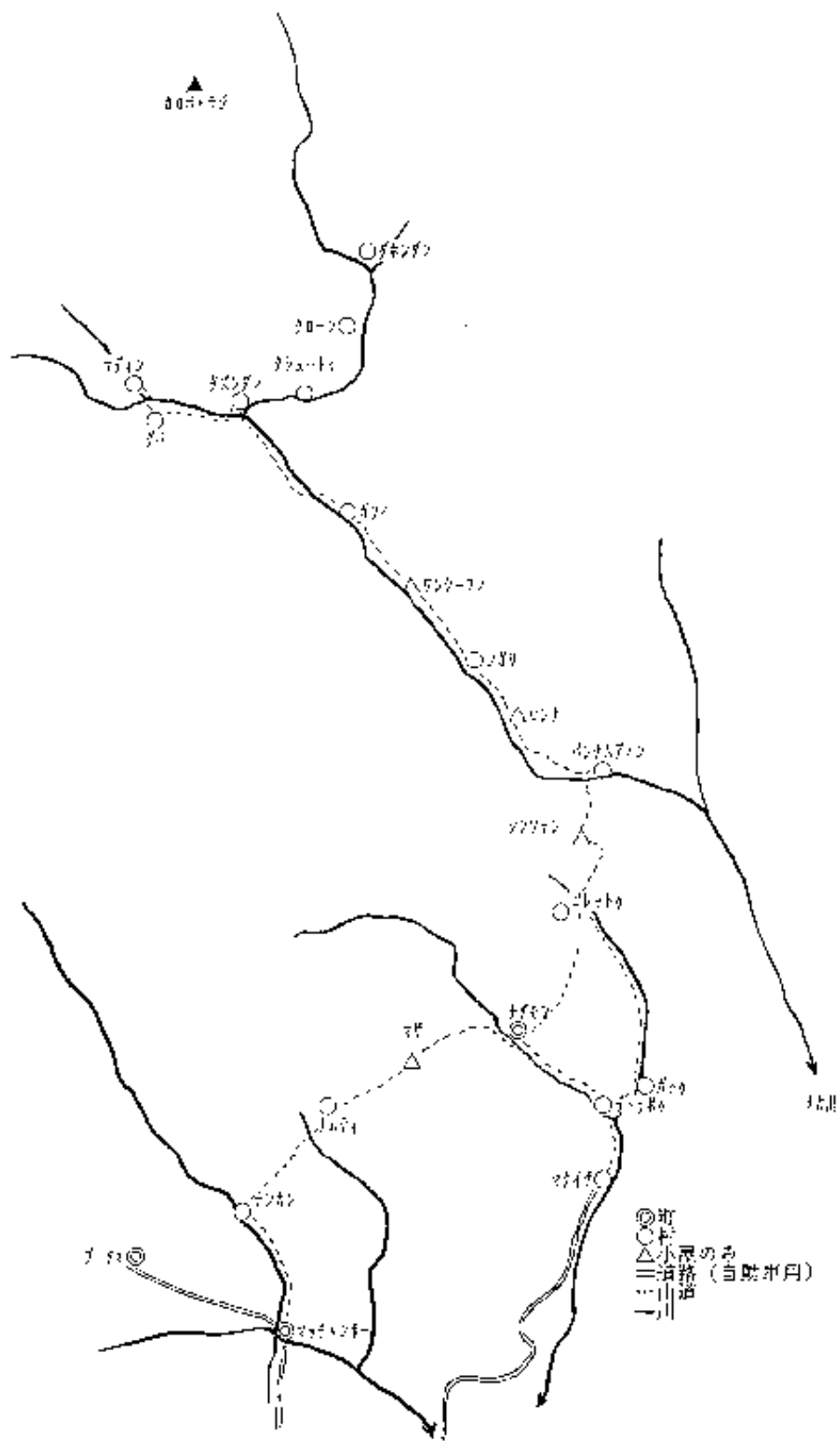
ダズンダンからアドウン谷方面のルートについて。

今回の偵察ではアドウン谷には入らなかったが、良くこの山域にはいるマン・ホン・ミン氏の情報によると、ダホンダンまでは3日行程。道はこれまでとおなじような道が続く。ダホンダンから先、村はなくなるが道はある。ポーターもBCまで行けるということ。ただ、村がないので、幕営具が必要。

ダズンダン～7マイル、1日～タシュートウ～9マイル（3マイル～タラトウ～6マイル）1日～クローン～8マイル、1日～ダホンダン～5日（冬期は7日）～カカボラジBC

（本記録で、net〇〇:〇〇とは、行動時間から休憩時間、吊橋の通過時間を引いたものである。休憩時間は1回約15分、吊橋は1人ずつ渡った場合、7人で10～20分ぐらいかかる。また、

村間距離については現地の人言うところにしたがった。距離というよりも時間から計算しているふしがあって大体 2 マイル 1 時間強。)



◎当初計画を変更した理由

偵察隊の当初の計画では、プタオからキャラバンを開始し、アドウン谷経由カカボラジ峰東側氷河舌端にベースキャンプを設営し、カカボラジ峰の東面および北面を踏査し、登山ルートを確認することとしていた。その際、キャラバンは往路14日間、帰路10日間でそれぞれ想定していた。しかし、現地にて入手した様々な情報を考慮した結果、私たちは、アドウン谷のルートではなく、当初計画にはなかったサンク谷へのルートを取ることにした。そのいきさつは以下の通りである。

1. アドウン谷経由BC予定地のルートでは、実際には当初想定より20日間もの日数が多く必要だと分かった。しかし隊員の勤務の都合から、その日数延長は不可能だった。
2. 我隊がアドウン谷経由でカカボラジが見える地点まで進むには、日数が完全に不足していた。
3. すでに下山してきた先行2チームの情報から、アドウン谷ルートは、積雪が多く進むのはかなり難しいことが分かった。
4. サンク谷経由カカボラジ南面に通じているルートがあり、山を見ることの出来る場所まで最短のルートである。

上記理由により、サンク谷へ進んだのであるが、雪崩の危険性や悪天候続きであること等を考慮した結果、不本意ながら、標高2170m地点を最高到達地点として引き返すこととした。

◎ヘリコプター(航空機)のチャーターについて

山の姿を写真に撮るといふ偵察隊の目的を達成するために、下山後、ヤンゴンにてヘリコプター(または航空機)のチャーターについて、政府(軍)と交渉した。その結果、軍の航空機を外国人である我隊がチャーターして、国境付近の山岳地帯を飛ぶことに関しては、ミャンマー政府の閣議承認を得た。しかし、チャーター料金が隊の予算を大きく上回っていたために、空から山の姿を見ることはできなかった。

その一方で、別ルートから貴重なカカボラジ北面の写真のコピーを入手することができた。

4. 天候

「2月がベスト・シーズン」とヤンゴンの人達に言われてこの時期にやってきたが、実際は、キャラバン中はほとんど毎日雨が降った。現地の情報によると、この時期はふもとでは雨が多く、山では雪が多いので登山には全く不向きである。地元の猟師や薬草採りは、7~9月に山に入り、カカボラジ峰のBC付近まで行くという。その時期はプータオ、ナグモン地区では雨期で雨が多いが、山岳地帯では雪が消え、アプローチが楽になり、天候も比較的晴の日が多いらしい。また、10月から雪が降り、積雪が多いと雪崩の危険性が高いという。

5. 道の状況

地元の村人が往来しているため、トレイルはしっかりしており、特にルート工作が必要な箇所はない。ただし、道はぬかるみが多く、滑りやすく、ヒルが多い。川には橋が架かっているが、

藤蔓や竹だけでできているものが多い。徒渉はない。ほとんどの行程は、樹林帯(ジャングル)の中を歩くので、展望は望めない。

6. ポーター

最終集落(クバ、マディン)を除き、この地域の住民はラワン族である。往路のポーターは全てラワン族だったが、女性や子供が多く、彼らは1人20kg程度しか担がない。キャラバン開始後、隊荷約800kgで47人のポーターを雇った。また、大きな村ごとにポーターを入れ替えなくてはならないので、ポーターの確保が常に問題となった。帰路は、チベット族のポーターを雇ったが、彼らはラワンに比べて強く、順調だった。ポーターの日当は1人1日300kyat(約300円)。

7. リエゾン・オフィサー

ウ・ラ・テイ(38歳。ヤンゴン大学地質学講師)とキン・マウン・テイン(30歳。内務省勤務)の2名が同行した。共に Myanmar Hiking & Mountaineering Federation のメンバーで登山経験ありと自称。しかし、今回の行程に関しては体力、技術、経験など初心者と同じだった。だが、自分たちでは、それを決して認めようとはしなかった。

キャラバン中のポーターの手配、メンバーの宿泊・食事の手配は、ほとんどサン・ミン・マウン(キャラバン・マネージャーとして同行)が行なった。

8. ガイド

ナグモンでラワン族猟師2名をガイドとして雇った。うちマン・ホン・ミン(65歳)は、元国会議員で地元への影響力は充分ある上、毎年カカボラジ峰近くまで猟に出かける山のベテランであり経験豊富。英語も少し出来る。年齢からは信じられないくらい体力があり、山での行動は軽快で、信頼できる人物。非常に役に立った。

9. 装備

キャラバン中は、テントはほとんど使わない。宿泊は民家または旅人用の小屋を利用した。行動中は、雨対策(傘と通気性の良い雨具)と丈夫な靴が必要。今回は、登攀具を全然使わなかった。

10. 食事

現地調達したものを食べた。主食は米。肉・魚や野菜はキャラバン中の村で調達可能。すべておいしい。生水さえ飲まなければ、腹は快調だった。

11. 医薬品

大きな病気、怪我はなかったが、虫が多く、虫に刺されて化膿することがあった。化膿止めとして、抗生物質を服用した。また、マラリヤ汚染地域なので、予防薬を飲んでいた。

他隊の動向

ミャンマー政府は、我隊の他に2隊に偵察隊の許可を出していた。即ち、同時期に3つの外国チームがこの山域を訪れていたことになる。その2チームについては、以下の情報を得た。

(1) 尾崎隊

尾崎氏と小学生の長男の2名は、我隊より3週間先行して入山した。彼らは、アドウン谷の最終部落ダホンダンからさらにカカボラジに向かってアドウン谷をつめたところ腰から胸まで没する雪に阻まれてそれ以上進めなかった。付近の丘に登って山の姿を見ようとしたが、悪天候のため見ることもできなかった。2月27日、我隊は下山して来る尾崎隊とすれちがっている。

(2) 仏隊

仏人1名のみ。彼は、山岳旅行を企画したり、その写真や文章をスポンサーに売ることが仕事としているフリーランサー。彼は、我隊寄居2日間先行して入山したが、今回はボホンダンまで行って引き返してきた。我隊とは2月28日、ダズンダンで会った。山の姿は見え、アプローチの行程も魅力に乏しく大いに失望していた。

会計報告（4月7日現在）

1. 収入

会員寄付(1)	2,815,000 円
隊員個人負担(2)	600,000 円
読売新聞分担分(日本分)(3)	2,000,000 円
読売新聞分担分(現地分)	1,054,121 円
NHK 撮影料	1,000,000 円
針葉樹会新年会剰余金	68,000 円
雑収入	9,884 円
合計	7,547,005 円…(A)

2. 支出

総費用(4)	5,496,497 円…(B)
--------	-----------------

3. 剰余金(5)

(A)-(B)	2,050,508 円
---------	-------------

注(1) 明細別紙

注(2) 引地	300,000 円
古田	150,000
古瀬	150,000

注(3) US\$10,170(換算レート@¥103.65)

注(4) 明細別紙

注(5) 本隊の資金に充当する

会費寄付(銀行振込分)

卒年	氏名	(万円)
14	佐々木 誠	1
15	岩崎 利一	3
19	松下 順吉	3
19	小林 茂雄	5
19	高野 秀男	1
21	関*田 良雄	1
23	石井 左右平	3
23	山崎 猛	5
23	田中 一雄	2
26	望月 誠治	1
28	海老沢 秀	1
28	中村 正司	1
28	渡辺 幸信	1
28	高橋尚好	0.5
30	石原 伸	5
30	藤原 謙一	1
30	石原 伸	3
31	宮川 次夫	1
31	高崎 治郎	5
32	春日井 真	1
32	山本 健一郎	10
33	丸山 附二	10
33	柴崎 新	5
33	上原 利夫	1
33	岡塚 治雄	5
34	宇田川 徳治	2
34	市川 隆一	2
34	大橋 善治	1
34	沢木 一夫	2
34	渡辺 嘉祐	1
35	中西 康	1
35	峰高 教通	1
35	小峰 隆	1
36	石 弘光	5
36	小林 進二	1
36	大賀 二郎	3
36	中島 寛	10
36	中川 滋夫	10
36	有賀 盈	1
36	小林正彦	1
36	山本 尚祺	1
37	大 健二郎	2
37	三井 博	2
37	遠藤 晶土	2
38	倉知 敬	10
38	多田 伸治	1
38	高橋 信成	2
39	村上 泰介	3
39	中橋 寿雄	1
41	佐藤 久尚	10
41	佐藤 之敏	10
42	原 博康	10
42	吉川 晋平	3
44	侯 昭	1
46	戸川哲哉	1
46	金子 晴彦	3
47	西牟田 伸一	5
48	井草 長雄	3
51	藤本 敏行	10
52	兵藤 元史	10
53	佐藤 浩郎	2
54	佐藤 周一	3
54	神野隆	5
55	米田 篤裕	10
57	富下 克彦	5
59	安島 孝知	5
59	稻毛 尚之	2
59	山本礼二郎	5
60	石丸 義男	1
60	五ヶ山 淳	1
H1	井上 裕之	1
H5	天羽 康之	1

<松尾 1

<中村 保 30

<前神 2

◎ 裝備之二提供下の通り

- 中村 保
- 山本 健一郎
- 倉知 敬
- 金子 晴彦
- 前神 直樹
- 加藤 博行
- 佐藤 浩郎
- 小林 伸
- 鮎沢 政文
- 田形 祐樹

合計: 281.5万円

偵察隊費用明細

(1/2)

	① Baht	② US\$	③ Kyat	④ Yen
(1) 隊員交通費				
航空運賃 (事前交渉) : 東京=HongKong=Yangon往復				J¥126,410.
航空運賃 (偵察隊) : 東京=Bangkok=Yangon 往復 Bangkok-東京	B29,200.			¥345,000.
航空運賃 : Yangon=Myitkyina=Putao往復 (日本人) (ミャンマー人)		\$2,520.	K11,676.	
市内交通費 : Bangkok	B1,770.			
市内交通費 : Yangon		\$670.		
市内交通費 : Myitkyina			K27,300.	
市内交通費 : Putao		\$100.		
	B30,970.	\$3,290.	K38,976.	¥471,410.
(2) 装備輸送費				
通関料他 (日本)				¥20,425.
航空運賃 : 東京-Bangkok-Yangon				¥94,200.
航空荷物料 : Yangon=Myitkyina=Putao往復			K33,365.	
ポーター費用 : Putao=Mading往復			K295,900.	
ロバ費用 : Nogmung-Gowlettu			K24,000.	
ボート費用 : Nogmung-Magweza			K6,000.	
トラック費用 : Magweza-Putao			K15,000.	
その他輸送費		\$87.	K4,500.	
		\$87.	K378,765.	¥114,625.
(3) 宿泊滞在費				
宿泊滞在費 : Bangkok	B2,743.			¥9,200.
宿泊滞在費 : Yangon		\$2,163.		
宿泊滞在費 : Myitkyina		\$550.	K2,400.	
宿泊滞在費 : Putao		\$1,641.		
その他の村での宿泊費			K25,200.	
	B2,743.	\$4,354.	K27,600.	¥9,200.
(4) 装備費用				
装備費 (日本で新たに購入したもの)				¥462,525.
装備費 (ミャンマー国内にて購入したもの)		\$400.	K13,200.	
		\$400.	K13,200.	¥462,525.
(5) 食料				
食料 (日本で調達したもの)				¥18,589.
食料 (ミャンマー国内にて調達したもの)		\$555.	K104,225.	
		\$555.	K104,225.	¥18,589.

(2/2)

(6) 入山料等

入山料	\$1,500 x 5人	\$7,500.	
ビデオカメラ持込料	\$1,000 x 1台	\$1,000.	
カメラ持込料	\$300 x 6台	\$1,800.	
		<u>\$10,300.</u>	

(7) 人件費

リエゾン・オフィサー	\$1,000.	K112,500.	
ガイド		K30,000.	
警察官		K7,800.	
キャラバン・マネージャー	\$1,600.		
代理人手数料	\$3,700.		¥173,451.
	<u>\$6,300.</u>	<u>K150,300.</u>	<u>¥173,451.</u>

(8) その他

土産品	\$175.		¥392,475.
ミャンマー・オリンピック委員会への寄付金(\$1,000.)			¥106,450.
Visa申請料			¥7,800.
印刷費			¥21,630.
通信費	\$625.	K24,900.	¥37,920.
その他・雑費	\$82.	K55,957.	
	<u>\$882.</u>	<u>K80,857.</u>	<u>¥566,275.</u>

合計 :	①	Bahts 33,713. (Ex. Rate @¥4.32)	=	¥145,640.
	②	US\$ 26,168. (Ex. Rate @¥103.65)	=	¥2,712,313.
	③	Kyats 793,923. (Ex. Rate @¥1.0365)	=	¥822,469.
	④			¥1,816,075.
				<u>¥5,496,497.</u>

カカボラジの伝説

カカボラジの名称については、キングドン・ウォードのように、カカルボラジとみる見方と、カカボラジとみる見方がある。前者については、金子民雄氏が「東ヒマラヤ探検史」等でその意味について説明している。すなわち、カカルボラジとはもともとチベット語のカ・カルボ・リ(白い雪の山)に由来するというものである。今回、グバ、マディンでは、チベット人に接する機会があったが、彼等は、カカルボラジ、カカボラジといった言葉に対して、特に反応せず、この点については確認できなかった。

一方、ミャンマーでの公称はカカボラジのようであり、また、ラワン族の人々はこの山をカカボラジないし、カカブラジ、カカプーラジとよんでいた。そして、ラワン族の人々の言うところによると、カカボラジとはラワン語であって、ラワンの古い伝承に由来するというのである。私にはいずれの説が正しいのかは分からないが、参考までに、ラワン族に伝わるカカボラジ伝説を紹介しておこう。なお、ミャンマー滞在中、カカボラジ伝説には何度か接する機会があったので、参考までに、かなりの部分重なっているにもかかわらず、2通り紹介する。

ナグモンにて、Mr. Wien Lawn から聞いたカカボラジ伝説

「カカボ(Khakabu)はラワンの言葉です。カには声(voice)、カボには、話すこと(speaking)ないし喜び(rejoicing)という意味があるからです。

むかしむかし、二人の獵師の兄弟がいました。ある日、二人はカカボラジまで狩りに出かけました。そして、彼等がカカボラジまで来たとき、弟の姿が忽然と消えてしまったのです。そのため兄は悲嘆にくれ、弟の姿を叫び求めました。その時、姿は見えませんでした。弟の声が聞こえてきました。「兄さん、私のことは心配しないでください。私はここにおります。来年もう一度ここにくるとき、私の子供たちをみんなつれて来てください。」そうして二人は別れ、兄は家に帰ったのでした。

翌年、彼は再びカカボラジに、すべての子供達をつれてきました。そして、彼等がそこに着いたとき、以前と同じように子供達の姿が消えてしまったのです。彼は驚き、不思議に思いました。「何がいけなかったんだ。何が起こったというのだ。」と、彼は呟きました。子供達はしゃべり、笑につつまれていましたが、その姿を見る事はできなかったのです。そのとき弟の声が聞こえてきました。「兄さん、私の家族のことは心配しないでください。私の家族はすでに私と一緒にいます。この地域とこの動物たちは私の財産です。だから兄さんは欲しいものを欲しいだけ捕り、手にいれることができるでしょう。」こうして、これまで、毎年獵師たちは狩りに出かけ、そしてそこは多くの種類の動物と花に溢れているのです。

カカボラジはまた、アタンブン(Ahtan bōn)ともいいます。アタンブンとは、常に雪と雲に覆われ、そしてとても険しい山という意味です。」

ヤンゴンにて、ナグモンのハンターMr. MANG HONG MIN の兄である Mr. MANG SIN SAR からいただいたカカボラジに関する小文

「カ・カボ・ラジ(HkaKaboRazi)の本来の意味」(抄)

…カカボラジは、ナグモン郡にある。ラワン族の口承によるとカカボラジのももとの名前は「アタンブン(Ahtan Bφn)」だった。それは、絶壁、そしてあたかも、雌鶏が羽根の下で卵を抱くように、常に雪に覆われているという意味である。それでは、なぜ、それがカカボラジと呼ばれるようになったのだろうか。

むかしむかし、ドウルウ族の獵師の兄弟がいた。彼らは、ジャコウジカやイノシシ、ターキン、サイ、野生牛、レイヨウなどの狩りをしていた。ある日、二人の兄弟はいつものように狩りに出かけた。二人の名前はブン・アン(HpungAang)とティン・アン(HtinAang)といった。彼らはターキンの足跡をたどってすすんだが、何も見つけられなかった。彼らがアタンブン山の見えるところまで来たとき、弟ティン・アンの姿が見えなくなった。そこで兄ブン・アンは辺りを探し回ったが、ティン・アンを見つける事はできなかった。彼はティン・アンの名を呼び、悲しみ、泣いた。その時、ティン・アンがアタンブンの主峰に現れ言った。「兄さん、私はここにいます。私を探さないでください。来年のこの季節に私の3人の息子と妻を連れてきてください。さあ、帰って私の家族に私のことを話してください。」ブン・アンは弟の頼みにしたがって悲しみに包まれながらも家に帰った。

翌年、ブン・アンは彼の3人の甥と、弟の妻を連れ、彼の末っ子を背負って山へ入った。彼らが、去年ティン・アンの消えた場所まで来たとき忽然と3人の甥とその母親の姿が消えてしまった。ブン・アンは転がり落ちながら、叫んだ。その時、彼の弟ティン・アンとその妻、そして3人の子供がアタンブン山の頂きに姿を見せた。ティン・アンは彼にいった。「兄さん！私の家族は皆ここにいます。もう嘆き悲しまないで家に戻ってください。ターキンの群れは、あなたのための群れです。1年に3頭以上殺さないでください。」

ティン・アンと彼の家族はナッツ神になった。彼らは、マリ・ルン・ブロン・ナッツの娘たちと結婚し、増えていった。彼らの住まうアタンブン山はナッツの声が満ち溢れるようになった。ナッツはとてもおしゃべりだったので、アタンブンはとてもにぎやかだった。時には、アタンブン山から大声が聞こえてきた。こうしてアタンブン山は「カカボラジ」と呼ばれるようになった。カカボ(Hkakabo)は賑やかな(Noisy)という意味であり、ラジ(Razi)は山を意味する。すなわち、カカボラジとは Noisy Mountain ないし Mount Noisy という意味である。…